

第 32 回東北大学歯学会講演抄録

日時：平成 9 年 12 月 5 日

場所：東北大学歯学部 B 棟 1 階講義室

— 一 般 演 題 —

1. 一健康保険組合における歯科保健活動の効果 (診療報酬請求点数の減少)

小澤雄樹, 岩倉政城, 田浦勝彦, 押切邦中, 坂本征三郎 (予防歯科)

1992 年 11 月から、一健康保険組合支部が運営している歯科診療室において、被保険者本人にたいして歯科保健活動を行った。活動内容は、歯科検診、歯科保健指導、歯科予防処置、歯科治療の依頼である。

保健活動は、健康保険組合支部の被保険者全員を対象とし、週に 2 回、半日の頻度で行った。受検率、被保険者のうち歯科検診を受けた人の割合は、この活動を初めて 2 年目の 1993 年に 40.6% と最高値を示したが、その後 15% 前後に低下した。

保健活動群の 1991 年 4 月から 1996 年 4 月までの 6 ヶ月間隔の 4 月と 10 月の被保険者数はほぼ横這いであり、同じ健康保険組合で歯科保健活動を行っていない地域 (対照群) はやや減少傾向であった。

保健活動群の受診率、すなわち医療保険を用いて歯科診断を受けた件数を被保険者数で割った値は、活動開始直後の 1993 年 4 月に一時的に増加し、その後徐々に減少した。歯科検診後に一時的に受診率が増加する傾向は、すでに指摘されているが、本調査でも同様の傾向がみられた。これは、検診で隠れていた疾病が指摘され治療を行ったためと考えた。

保健活動群の 1991 年 4 月から 6 ヶ月間隔で集計した被保険者 1 人あたりの 1 ヶ月分の診療報酬請求点数の累積値は、1992 年 11 月に保健活動を始めると、まもなく、対照群よりやや低い値を示し始めた。2 年後の 1994 年 10 月からは、さらにその差が大きくなった。それぞれの回帰直線の傾きは統計学的に有意な差であった。

被保険者 1 人あたりの歯科の請求点数、累積点数も、それぞれ請求件数、累積件数と同じ傾向を示した。

これらの結果から、歯科保健活動を行い、それによって医療費の削減を期待するには、保健活動を長期にわ

たって行うことの必要性が示唆された。

2. HLA-DQA1 によるヒトのう蝕の DNA タイピング

千葉潤子, 小澤雄樹, 坂本征三郎 (予防歯科)

近年、分子遺伝学の展開により、多因子病の病態解明が進んでいる。HLA (human leukocyte antigen) は、遺伝的多型を示すものとして、免疫応答の個体差を産み出しており、HLA の多型性と強い相関関係を持つ疾患が数多く報告されている。そこで、う蝕の宿主のリスク因子を調べるために、HLADQA1 の DNA タイピングを行った。

調査対象は、カリエスフリーの 66 名と DMFT が 10 以上の 40 名で、すべての対象者は 18 歳以上 (平均年齢は 20 歳) であった。試料の採取は、綿棒で対象者の頬粘膜を擦過し、この剝離細胞が付着した綿棒を鋏でカットし、5% キレックスとプロテイナーゼ K でインキュベートし、セントリコン 100 に入れ蛋白を除去、ろ過濃縮し DNA 溶液を抽出した。HLADQA1 遺伝子領域を増幅するために、ビオチンで標識したプライマーと taq-DNA ポリメラーゼ、d-NTP mixture を加え、サーマルサイクラーで増幅した。次に、アリル特異性オリゴヌクレオチドプローブを用いて、増幅産物とハイブリダイゼーションさせ、発色液として過酸化水素と無色のテトラメチルベンチジンを加えて、ストレプトアビジン-HRP 抱合体でテトラメチルベンチジンを青色の沈殿物に変化させ青色のシグナルとして検出した。(ドットプロット法)HLADQA1 の各遺伝子頻度について χ^2 検定を行ったが、0101, 0102, 0103, 0201, 0301, 0401=0501=0601 (この 3 つは識別していない) の各対立遺伝子頻度について、カリエスフリー群とカリエス多発群との間で有意の差が認められなかった。

そこで、このほかに HLA 遺伝子領域には、HLA-DQB1, HLA-A, HLA-B, HLA-C HLA-DR の多型性がある遺伝子座があるので、今後、これらの HLA 遺

伝子についても、う蝕との関係を検討することを考えている。

3. 顎関節のMRI—第2報：FLASH法におけるFlip Angleの検討—

阪本真弥¹⁾、日向野修一²⁾、高橋昭喜²⁾、栗原紀子²⁾、阿部喜弘³⁾、梁川 功⁴⁾、笹野高嗣¹⁾(¹⁾口腔診断・放射線、²⁾東北大・医・放射線科、³⁾国立仙台病院・放射線部、⁴⁾東北大・医・放射線部)

我々はすでに、顎関節円板の形態や位置のMR画像について検討し、FLASH法のプロトン密度強調画像が他のシーケンスに比較して優れていることを本学会において報告した。しかし、FLASH法は、flip angleによって画像コントラストや信号強度が変化することから、今回は、関節円板の評価に適したFLASH法のflip angleについて検討し、報告した。

対象は、健常ボランティア5例で、方法は1.5Tの超伝導MR装置で、閉口位にて下顎頭の長軸に垂直な矢状断を撮像した。TR/TE: 450/11で、flip angleを10°から70°まで10°ずつ変えて撮像し、比較検討した。

画像の評価は、1. 画像コントラスト、2. コントラスト-ノイズ比、3. 信号-ノイズ比、4. 視覚的評価の4つの方法で行った。

その結果、

1. 画像コントラストはflip angleが小さいほど高かった。
2. 円板と周囲組織のコントラスト-ノイズ比はflip angleが30~60°で高かった。
3. 信号-ノイズ比はflip angleが大きいほど高かった。
4. 視覚的評価は、総合的にflip angleが30~50°で優れていた。
5. 以上より、FLASH法におけるflip angleは、視覚的評価に優れ、コントラストとコントラスト-ノイズ比が高く、信号強度の稼げる30~50°が適していると思われた。

4. 舌癌の頸部郭清で気付かれた耳下線Warthin腫瘍の1症例

吉田光秀(大学院)、熊本裕行、一迫 玲、大家 清(口腔病理)、後藤 哲、佐藤修一、川村 仁(口腔外科1)

Warthin腫瘍は耳下腺の下極から下顎角部に好発する良性上皮性腫瘍で、50歳以上の男性に多い。舌癌の頸部郭清で気付かれた耳下腺Warthin腫瘍の1症

例を報告する。症例：56歳、男性。家族歴に特記事項なし。15年前より不整脈の既往がある。現病歴：平成8年9月頃より舌の右側辺縁部の接触痛を自覚し、某歯科で右側上下顎臼歯鋭縁の削合を行ったが痛みが消えないため、東北大学歯学部附属病院第1口腔外科を紹介された。現症：舌の右側辺縁部に周囲の硬結をとともう不整形の潰瘍と右側頸部リンパ節に腫脹がみられた。舌生検において角化傾向の著明な高分化型扁平上皮癌と診断された。治療：術前の化学療法(cisplatin, pirarubicin, peplomycin sulfate)の後、舌部分切除術と右側全頸部郭清術が施行された。手術標本では、舌の筋層深部に達する扁平上皮癌およびリンパ節転移がみられた。外来にて経過観察していたが、術後7ヶ月に左側頸部にリンパ節転移が認められたため左側全頸部郭清術が施行された。摘出組織標本：舌の扁平上皮癌のリンパ節転移と、耳下腺部にオンコサイト様の上皮性成分の増殖とリンパ濾胞をとともうリンパ性組織の増殖からなるWarthin腫瘍がみられた。考察：近年、重複癌の発生頻度は増加傾向にあり、特に頭頸部腫瘍に重複癌が多いといわれているが、口腔癌と同時期にWarthin腫瘍が発生した報告例は稀である。本症例では頸部郭清中に耳下腺リンパ節と思われた組織がWarthin腫瘍であった。口腔癌と同時期に頭頸部腫瘍が発生した症例では癌のリンパ節転移との鑑別が重要である。

5. 当科において10年間で経験したエナメル上皮腫の検討

高橋正任、伊藤正健、友寄泰樹、福井功政、力丸 靖、松田耕策、越後成志(口腔外科2)

1986年1月より1995年12月までの10年間に当科を受診した外来患者16503例中、歯原性腫瘍は90例であった。そのうち病理組織学的にエナメル上皮腫と診断され、加療を行った患者24例について検討したので報告した。性別では12:12と差はなく、年代別では20代が7例と最も多く、平均年齢は34歳であった。発生部位別では、上顎骨が2例、下顎骨が21例、残る1例は上顎結節部軟組織より発生した周辺性エナメル上皮腫であった。X線所見では単胞性が7例、多胞性が11例、蜂巣状を呈していた例が4例であった。治療法は、腫瘍摘出術を行った例がほとんどであり、骨切除例は5例で、そのうち腸骨移植を行った例が2例、下顎枝矢状分割にて摘出した例が1例、下顎骨体部を頬舌的に矩形に切除し、歯槽部と下顎下縁部を残した例が1例